

ギンブナ



諸木にて

(撮影：桐原佳介)

ギンブナは、日本全国に分布する身近な淡水魚です。同じフナの仲間であるキンブナやゲンゴロウブナとの見分け方は、背びれの筋の数(条数)が17本あることや体型、鰓の中のクシの数(鰓耙数)で区別できます。このギンブナは、面白いことにオスが殆ど確認されていません。産卵する時、他の魚の精子で受精してもギンブナが生まれる仕組みを持っています。以前、ご近所さんから緑水湖で捕れた立派な寒ブナを頂きました。40センチ以上の大きさだったので、別の種類かと思つたくらいでした。ちょうど遊びに来ていた義父にさばってもらい、魚汁と空揚げにして味わいました。臭みがないあっさりとした白味を楽しむことができ、好きな魚の1つになりました。

このギンブナが捕れた場所は、砂礫に多くの水草が茂る、ごく普通の水路でした。私は、この水路にどんな生き物がいるのか、下流から上流に向かって長さ100メートルほどの間を、川の中に入って探してみました。すると、捕れた魚の種類は12種類、その中には環

境省指定の絶滅危惧種が3種も含まれ、ヌマエビが大量に見つかりました。別の日には、同じ場所からやや下流の場所でオオタニシも見つかっています。この貝も県指定の絶滅危惧種です。今まで私が町内の水辺を見て回った限りでは、こんなに生き物の密度の高い流れを見つけたのは初めてでした。その一方で気になるのが、小松谷川に注ぐこの水路の下流はすでにコンクリート護岸が施され、生き物が棲みにくい環境になっていることです。日本各地で失われつつある、日本在来の生き物たちが満ちあふれる河川が、まだ南部町の各所にあることを奇跡のように感じます。この環境を財産と感じる意識がより広く共有できれば、町のあり方にも変化が出て来ることと思います。

東北の童謡「どじょっこだのー、ふなっこだのー、夜が明けたと思えばナー♪」という歌が聞こえ来そうな南部町の水の流れ、次の世代にも引き継いで行きたいものです。

自然察指導員 桐原真希